ものづくり教育の実践的研究 Ⅱ

－地域の伝統工芸の体験学習－

The Practical Study of Handicraft Education Ⅱ

—Learning through Experience of Traditional Craft in the Region—

辻　　泰秀・石原　正悟
TSUJI Yasuhide and ISIHARA Shogo

キーワード：伝統工芸・手漉き和紙・小学校・体験学習・教育実践

1．はじめに

現代の機械による大量生産社会では，物品があふれ紙も簡単に手に入るようになっている。ところが，手づくりが主体であった時代には，紙は貴重な日用品であり，紙漉きをはじめとした伝統工芸に携わる職人によってものづくりが支えられてきた。全国各地に伝統的に和紙を生産してきた地域はあるが，とくに岐阜県美濃市は古くから紙の産地として有名である。美濃和紙（美濃紙）と称され奈良時代から1300年以上の歴史がある。美濃和紙は原料のこうぞ（楮）の木からいくつもの工程を経て丹念につくられるため肌理が柔らかく，和紙としての味わいをもっている。障子やあかりに使用したときの光の透かし具合，自然や木といった環境との融合，手で触れたり筆で描いたときの感触や表現効果といったものが長年の創意工夫の蓄積によって卓越した状態になっている。外見は似ていて安価な和紙をしばしば見かけるようになっているが，和紙の表面の感触，光の透かし具合，保存性や繊維の丈夫さといった紙の様々な条件に照らし合わせると，美濃和紙には伝統に裏付けされた職人の技が生かされている。

ただし，伝統的な技をどのように次の世代に伝えていくのか，手づくりの和紙のよさを広く人々が理解するにはいかなる方法が可能かを検討することが求められている[1)]。そのため，既に美濃市では紙漉き職人が学校のゲストティーチャーとして子どもたちの紙漉きの支援にあたってきたり，美濃和紙の里会館・今井家住宅・あかりアート館といった和紙に関する社会教育施設を設置するなど，伝統文化の継承と発展に向けた手立てが行われてきた。本稿では，工作・工芸教育の実践との関連から学校で行われている紙漉きの学習について述べることにする。

2．学校における紙漉き

地域の伝統的なものづくりとして紙漉きが定着するためには，美しく成分としても適切な水が豊富にあること，こうぞをはじめとした原料や紙漉きに必要な道具が入手しやすいこと，職人等の人材が確保されていること，和紙を扱う商業が盛んであること，城主や藩などの支援があったことなどが条件になってきた。美濃市の場合には，このような諸条件が充たされ，上有知と呼ばれていた時代から全国有数の和紙の産地になってきた。

特に長良川の支流である板取川の流域の牧谷（上牧・下牧）では，昭和30年代頃まで各家庭で紙すきが行われていた。当時の上牧地区の写真が残されていて，ほとんどの家で天日によって和紙を乾燥させている光景が記録されている。美濃市全体として「昭和30年代には1200戸あった生産者数が，昭

和40年には500戸に激減し，その後においても逐年減少し昭和50年には100戸，昭和60年には40戸となった」という[2)]。紙漉きを取り巻く環境の変化によって，現在では職人は限られた人数になってしまっているが，美濃和紙が伝統に基づくものであることには違いない。

総合的な学習に見られるように学校において地域の特色を生かした教材を取り上げることは，今日では一般的になってきている。子どもたちが紙漉きのことをフィールドワークを伴いながら調べたり，紙漉きの作業を体験することは，地域の特色や実体験を重視する現代の教育課題にあっている。けれども，牧谷地区の各小学校では，学習指導要領で総合的な学習が位置付けられる以前からカリキュラムの中に紙漉きの体験学習が取り扱われてきた。ちなみに地元の紙漉き職人がゲストティーチャーとして子どもたちにかかわってから既に20年以上たっている。ゆとりの時間の活用であったり，自由研究や郷土学習として紙漉きに着目してきた点で先駆的であった。

近年の牧谷地区では，高齢化と少子化が顕著になり，長年にわたって紙漉きの学習が行われてきた学校の再編・統廃合が実施されてきた。平成15年４月には，下牧の蕨生小・長瀬小・片知小・神洞小の４校を旧長瀬小の学校施設を使って下牧小学校として再編した。そして，平成21年４月には，上牧小と下牧小が旧蕨生小の学校施設に合併して牧谷小学校となった。したがって，牧谷小学校そのものの歴史は短いが，上牧小学校や下牧地区にあった４校の紙漉きの学習を引き継いでいる。学校再編に際して紙漉き工房を併設する図工室を新築し，一年を通して地元の紙漉き職人が子どもたちの教育にあたっており，地域の特色を生かした伝統的な紙漉き学習が位置付けられている。学校が再編され名称はかわっても，定着してきた紙漉きの学習内容や教育環境を，そのままの形で引き継ごうとした地域の人々や教育関係者の熱意が読み取れる。

上牧小や蕨生小などそれぞれの学校で行われてきた紙漉きの学習は，一つの教科だけとか，ある学年での教材の一部としての取り扱いではない。年間にわたって，各教科の学習とかかわりながら，全学年を通して行われてきた。紙の原料であるこうぞの木を育てること（理科・生活科），地域の職人さんの仕事場を訪問するなど地域の伝統や地場産業を調べること（社会科），和紙を使って絵や工作に取り組むこと（図工科），郷土や身近な人々への愛情をもつこと（道徳），そして，人々と交流しながら紙漉きの様々な工程を体験すること（総合的な学習）といったかたちで教科横断的・総合的に学習が行われている。また，低学年で溜めすきをしてはがきをつくる，中学年で溜めすきで色紙の大きさの和紙をつくってあかりアート展への作品も制作する，高学年で流しすきに習熟して卒業証書をすくといったように各学年を通した活動が行われてきた。

学校に招聘している職人と学校とのつながりも，ゲストティーチャーとしての一時的なものではない。お祖父さん世代である職人自身が昔通った，息子や娘も卒業した，現在孫も在学している学校といった世代を超えた学校との関係があり，学校への強い愛着もある。これからの地域を担う子どもたちが紙漉きを体験することで地域のよさを実感してほしい，できれば将来の紙漉きの後継者が出てきてほしい，といった期待感をもっている。季節毎に職人が学校に出向いたり，仕事場を子どもたちが訪問して交流をしているので，子どもたちや教職員とのコミュニケーションも良好である。子どもたちは地域のお祖父さんであり先生でもあるということで親しみをもって接しているし，教職員も紙すきの過程を職人から学んで教材研究を進めティーム・ティーチングが成立するようになっている。

３．紙漉きの過程と学習

原料である木から紙がつくられる紙漉きは，いくつもの手作業による工程がある。途中での作業が十分でないと，紙の繊維が粗かったり不純物が入り用途によって不都合なことが生じてくる。作業の一定の手順があり，親から子どもへ徒弟制度的な状態で身につけていった。ただし，それぞれの作業の段取りは地域や用途によって微妙に異なる。70歳を越える職人にお話を伺うと，小・中学生の頃か

ら夜明け前に起きて一日中紙漉きの仕事をしていたと言う。日々の仕事の蓄積によって体験的に手順や技を身につけたわけである。同じ牧谷にあり隣接した上牧と蕨生とでは，井戸水の成分の違いから紙漉きの方法が異なり，女性が結婚して仕事場を移動すると大変な苦労をされたという話も伺った。

ここでは，一般的な紙漉きの手順について示す。明治時代以降は，全てが手作業ではなく束ねる・圧力をかける・乾燥をさせるといった部分に機械を使うことが多くなった。寒さの厳しい時期に川に入って原料を浸たす・天日で乾燥をさせるといった光景も珍しくなっていった。また，限られた時間の中で子どもたちが全てを体験することは無理であり，紙漉きの工程の一部を取捨選択する場合もでてくる。このように紙漉きそのものの変容やカリキュラム上の課題はあるにしても，できるだけ手作業で行っていた活動を追体験し，ものづくりの過程や工夫を理解することが大切であると考える。

現代の日常生活は便利になってはいるが，つくられる過程や元の姿はブラックボックスような状態になっている。たとえばスーパーの食品売り場にいけば野菜や魚が容易に手に入る。ところがその野菜がどのような土地や気候の中でつくられたのか，いかなる方法で育成されたのかを知ることはない。魚にしても既に加工された切り身がパックに入っていて本来の魚の大きさや特徴をイメージできなくなっている。同様に，毎日のように紙を手にしていても，和紙が木からできていることや，長年にわたる工夫や苦労によって紙がつくられていることを意識できなくなっている。改めて紙漉きの工程を学ぶことは，こうした体験や知識の欠落を補う意味がある。

紙漉きというと，下記の⑪の流しすきの動作を追体験する場合が多い。けれども古くからの和紙の産地である牧谷では，全ての工程を経験することに特徴がある。地道な準備の段階にこそ職人の工夫や技があるからであろう。

《紙すきの工程》[3)]

①　刈り取り・束づくり

紙の材料になる木はこうぞ・みつまた・がんぴなどである。主にこうぞが使われている。冬の寒さの厳しい時期に，こうぞの木の刈り取りをする。根元より少し上を刈り取り扱いやすい長さや重さに切り揃えて縄で束ねる。

②　蒸し・皮はぎ

楮の束を釜に入れて4時間ほど蒸した後，熱いうちに皮をはぎとる。皮を束ねて竿にかけて乾燥させる。

③　水浸（みずづけ）・川ざらし

原料であるこうぞの木の皮を川の浅瀬や水槽に数日浸す。煮熟しやすいように軟らかくさせる。成分の一部が水に溶けて流れるので自然の漂白になる。寒い時期にするため大変であるが，水槽よりも川で水につける方が良質であるという。

④　煮熟（しゃじゅく）

釜に水と煮熟剤を入れて沸騰させる。そして，水浸した原料を高温で2～3時間煮熟すると，成分の一部が溶けて紙になる繊維のみが残る。従来は煮熟剤として草木灰や石灰を使用していたが，現在はソーダ灰・化成ソーダ灰といったアルカリ薬品を使用する。

⑤　灰汁（あく）抜き

煮熟から一晩おいてから，釜から原料を取り出す。川や水槽で2 4時間以上流水させた状態で水洗いする。

⑥　漂白

水槽や川の浅瀬に原料を薄く広げて漂白をする。

⑦　水洗

漂白後の原料を，水槽の中で2～3日間十分な水を使って洗う。

⑧　除じん（ちりとり）

水が流れる水槽の中にざるを固定してその中に原料を入れて余分な部分・砂・ゴミなどを手で取り除く，全くの手仕事である。湧水のある場所に小屋を建てちりとり小屋にした。

⑨　叩解（こうかい）

ちりとりの終わった原料を，石盤（打ち石）の上で木槌で打って繊維を細かくする。

木槌２個を両手にもって交互に手打ちする。木槌の打つ面には溝が彫ってあるので，細かく打ち砕きやすい。近年は，ビーターと呼ばれる機械が普及している。

⑩　染色・紙料の調整

着色紙にする場合は，叩解後の原料を着色槽に入れて混ぜる。紙の質によって，こうぞ・みつまた・がんぴなどの原料の配合を調整する。

⑪　抄造・流しすき

水を入れた容器（すき舟）に叩解をした原料を入れて，その原料をかき混ぜてからとろろあおいやのりうつぎの粘液を加える。こて（漉桁）という木枠とす（簀）というあみ状の道具が主に用いられる。簀桁に紙の原料を汲んで，左右に動かして繊維をからませ紙を漉き上げる。汲む水の量や手を動かすスピードや回数によって紙の厚さや丈夫さが変わるので熟練を要する。漉いた紙は紙床に重ねる。

⑫　脱水

漉いた紙を紙床にかさね　紙床にあるしめった紙を脱水機で圧力をかけて脱水する。

⑬　乾燥（板干し）

圧力を加えて脱水したしめった紙の重なりから一枚づつはがす。刷毛でしわにならないように丁寧に板干などにはりつけて乾燥させる。板の木目が紙に模様になって残ることがあるが，それが手漉き和紙の味わいにもなっていた。従来は板ばりをして天日で乾燥させるという方法をとっていたが，近年は鉄板乾燥機が普及している。

⑭　選別

手漉きの紙は微妙に一枚づつ異なるので，厚さ・きずやしわ・不純物などを点検し選別する。

⑮　裁断

用途に応じて裁断をする。

⑯　包装仕上げ

枚数をまとめて包装紙で包んで製品にする。

図１．学校のこうぞ畑の手入れをする。
草取りをしながら生育を確かめる。

図２．冬にこうぞを刈り取る。剪定用のはさみやのこぎりを使う。

図３．皮をむいた後に釜（ドラム缶）で蒸す。

図４．ていねいにちりとりをする。

図５．こうぞを木槌でたたいて，繊維をほぐす。

図６．とろろあおいを収穫してねべしをつくる。

このような工程を視覚的に示すために，筆者は今のところ美濃市の関係者が作成した「美濃紙の誕生」「美濃紙の道具づくり」の二つのビデオ教材を使用している。岐阜大学の共通教育「岐阜県の生活と文化」の講義の中で「美濃紙の誕生」を使って木から紙ができる様子を紹介したときの学生の感想の一部を取り上げる。

○今まで紙づくりについてテレビでやっていたり映像で見たときは，紙すきの場面しか見たことがなく，あの液体はどうやって抽出されたものなのか知りませんでした。あの白い液体になるまで何度も水洗いしたり天日干ししたり思っていたよりも手間がすごくかかっていることが分かりました。紙の天日干しでは，刷毛で紙を板にくっつけていたけど，結構強い力ではいでも破れていなかったのには驚きました。普通の紙ならばすぐ破れてしまいそうだけど，やっぱり普通の紙にはない丈夫さを感じました。一度さわってみたいです。

○１枚の紙をつくるためにとても多くの工程が必要で，職人さんの努力と汗が感じられました。特に漉きの部分は職人の技が光るのでかっこいいと思いました。これだけの手間をかけて作られた美濃和紙をぜひどこかで探してみようと思います。これからも途絶えることなく，美濃和紙が作り続け

られるといいなと思いました。

○こうぞの木を育てるところから知ったので，美濃和紙がつくられるのはとても時間や手間がかかることで大変なことだと思いました。特に寒い時期に水に手を入れたり手作業できれいに皮をはがしたりをするのがとても大変だと感じました。最初はあんなぼろぼろな感じの硬い木の皮だったのに，きれいな一枚の白い紙になって，とてもすばらしい職人さんの技だと感じました。数多くの過程を経て一枚の紙になるという美濃和紙のすばらしさを実感できました。

○木からつくる和紙づくりは初めて見ました。和紙の原料のこうぞはもっと太い木かと思っていたのですが，すごく細くて，しかも１年で育つのに驚きました。木の皮をはぐのを手作業で行っていましたが，あんな繊細な作業は機械じゃできないなと思いました。はぎ終わった皮を何度も洗ったり干したりしていましたが，寒い季節だから大変だろうなと思ったし，なんで何度も繰りかえさないといけないのかとも思いました。紙をすく時，たてと横の動作を繰り返していましたが，たてと横を重ねることで，より強い紙ができるんだなと思いまはた。

○和紙を漉くときの作業で，簀というあみのようなものを液の中でじゃぶじゃぶすることで紙ができるのが不思議だと思いました。すくった液を前後左右に動かして均一にして作っていると初めて知りました。漉きをしているおばあさんの動きが体でおぼえているのか，動きに全く無駄な動きがなく，これが職人の技，すばらしい技術だなと思いました。

通常の紙漉き体験では，簀（す）桁（けた）を左右に動かしながら紙を漉き上げる動作を行っている。手や体を動かしながら原料の液が紙のようになっていく過程を知る上で意味がある。ただし，木から紙へと変化するいくつもの過程の一部であり，地道な工程の各部分は含まれていない。紙漉き職人以前にも楮の木を育てる・刈り取るといった人々の作業がある。全体の過程を体験し，大量のこうぞの木から実際に紙の原料となるのはわずかであること，木から紙になるまでに多くの時間や手間を要すること，そして，過程の中に先人の知恵が存在していることなどを体験的に学ぶことが求められる。

４．上牧小学校における紙漉きの学習

岐阜県美濃市立牧谷小学校の校区である上牧・蕨生・長瀬・片知といった地区では古くから紙漉きが行われており，現在でも伝統的な技をもつ職人が仕事に取り組んでいる。上牧小学校は「紙漉きの学校」と称され，図工室の他に専用の紙漉き工房や資料室があった。そして地元の４名の職人が長年にわたって子どもたちの紙漉き学習を支援してきた。紙漉き工房は小学校の体育館の改築の際に出た資材を再利用して建築したもので，流しすきや溜めすきのための道具が備えられていた。資料室は地域の家庭で使わなくなった紙漉きの道具や材料の提供を受けて整備した。そして，和紙職人も伝統工芸の担い手として卓越した実績や技をもつ方々であるにもかかわらず，子どもたちの教育を目的としていることからほとんどボランティアの状態で担当されてきた。地域の特色を生かした学校づくりのために限られた予算を工面し行政・学校・地域・家庭が連携してきたことが伺われる。上牧小学校は平成９年に地道な教育活動で成果を上げている学校に贈られる第28回博報賞・伝統文化教育部門を受賞している。その際の岐阜新聞の記事には下記のように示されている[4]。

「上牧小学校は，約千三百年の歴史がある美濃和紙の紙すきを学習に取り入れ，伝統工芸の認識を高めるように努めている。1990（平成２）年度からは，卒業生が自分たちの手で卒業証書用紙を作る

ことに取り組み，伝統工芸を受け継ぐ意識が育っている。和紙を活用した活動が始まったのは88年。美濃市の『創造教育』指定校（２年間）となってからで，89年度には同校創立百周年を記念して紙すき教室が完成。すき槽２台，乾燥機なども整った。早速，紙すき伝統工芸士４人の指導で３年生以上を対象にした体験学習に入った。以来，はがき作り（１，２年生），色紙作り（３，４年生），卒業証書作り（５，６年生），紙すきクラブの発足など活動が拡大した。昨年は紙すきクラブが，原料のコウゾの原木から紙すきができるまでの工程を実践した。紙すき教室が完成したときから指導してきた伝統工芸士の後藤明さん（67）は，『ふと紙すきの伝統を残したいと思う子が現れればいいが』と後継者の発掘に期待する。内木弘文校長は『指導していただいた４人の先生にお礼申し上げたい。児童の伝統工芸を大事に受け継ごうとしている姿から，児童の心に郷土を愛する心や地域の産業への誇りが芽生えてきていることを確信している』と話している。」

図７．低学年は溜めすきではがきをつくる。
年賀状にする。

図８．中学年は溜めすきで色紙を作る。
すいた和紙を使って書き初めをする。

図９．高学年は流しすきで卒業証書がすける
ようにする。

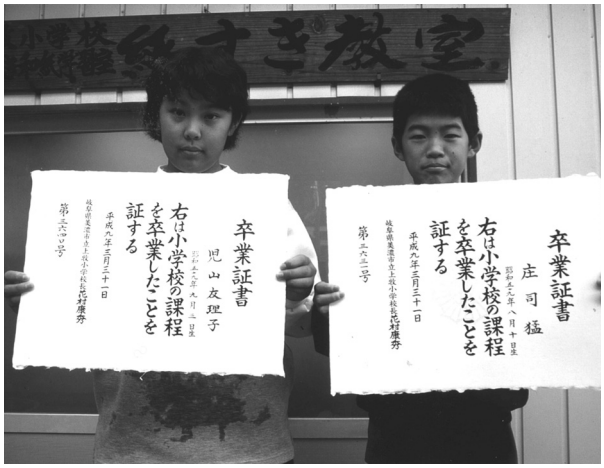

図10．型紙を入れて卒業証書を完成させる。

上牧小学校において紙漉きの学習の成果が出てきた背景として，1300年にわたる伝統，創造教育の理念とそれに基づく創造展（市の子どもの作品展）の存在，校区に４人の伝統工芸士がいること，校内に紙すき教室があること，ＰＴＡ・地域・学校の教職員の努力や支援，が指摘されている。

上牧小学校では紙漉きでつくられた和紙を，はがき（低学年）・色紙（中学年）・卒業証書（高学

年）の他に学校行事などと関連させて有効に活用してきた。活用の方法としておおよそ下記の①～⑦の項目があげられる。

①　紙染め

たらいに湯を入れて色粉をといて染める準備をする。和紙をたらいの中の色水につけて染める。天気がよい日に様々な色の紙に染めて運動場の遊具・木の幹・プールの柵などに並べてかわかす。紙が並ぶことによって見慣れた風景がかわって見える。色和紙は，みこしやはっぴなどをつくるのに使う。

②　はっぴつくり－運動会でのおどり－

運動会での「上牧よいとこ」のおどりや秋の「上牧みこしまつり」に和紙でつくったはっぴを着る。はっぴを型にしたがってつくり，装飾は貼り絵・ちぎり絵風に工夫する。色や図案が異なり楽しい雰囲気になる。

③　上牧みこしまつり－みこしつくり－

タテ割りのグループ毎にみこしのデザインを考え，木で骨組みをつくった上に和紙でおおって大きなみこしを共同でつくる。みんなで和紙のみこしをかついで地域をねりあるく。

④　のれん

染めた和紙を使ってのれんをつくる。のれんの模様は，貼り絵やちぎり絵で表現する。のれんの作品コンクールや創造展に出品する。

⑤　あかり

和紙を使ってランプシェード（あかり）をつくる。校内の展覧会の後，美濃和紙あかりアート展に出品する。

⑥　たこづくり

地域のボランティアを招いて，和紙と竹で和凧をつくる。凧の紙に絵や書をかく。

⑦　社会見学

校区の紙すき職人の仕事場や紙工場を見学する。

図11. 上牧みこしまつり。和紙のはっぴを着てつくったみこしをかつぐ。

図12. のれんをつくる。染めた和紙にはり絵をしたり描いたりする。

5．牧谷小学校における紙漉きの学習

牧谷小学校は上牧小学校や下牧小学校の学習内容や成果をふまえ，学校の再編に際して紙漉き工房

を兼ねた図工室を新設した。旧上牧小学校の４名に旧下牧小学校の校区に在住の職人を加えて手厚い支援体制になっている。ここでは，2009年９月16日（水）に旧下牧小学校の校区に在住の４名の紙漉き職人を講師に招いて行った実践について報告する。この日は３・４年生を対象に行い，２つの活動内容になっている。一つは流しすきで，もう一つは伝統的な紙漉きとはやや異なるが，職人が教材用に考案した道具を使った方法である。

流しすきは，長年紙漉きに携わってきた年長者の職人が指導されていた。児童たちは順番に１列に並び，先に体験している友達の様子や，手の動き・立つ位置・力の加減など，見て学べることはすべて吸収できるようにじっと見つめていた。職人は特に言葉での指導をしているわけではなかったが，子どもの手をとり次々と紙漉きの動作を支援していた。子どもたちの経験は１度や２度しかないはずであるが，全員が失敗することなく紙をすいている。一部が厚くなってしまったり，穴があいてあいてしまうこともなく，美しい紙が漉かれていた。これは，職人の方が成功させてあげたいという気持ちをもっていて，ポイントごとに支援しているからであろう。子どもたちは順番を待って見ているうちに，自ら学習し本番へと臨む。自ら学び取ろうとする意欲があった。

もう一つの紙漉きは，親子のペンギンや蟹などのキャラクターを漉くようになっている。クッキーづくりの型に似たものを和紙の上に置き，染色した原料を流し込み絵を描くという方法である。紙に染料や顔料等を使用して絵を描くことは経験しているが，紙漉きの方法を用いて表現することはほとんどないはずである。型は定まったものしかなく，自在に図案を工夫することはできない。伝統的な紙すきとは異なるが，取り組みやすい教材である。型は５ｃｍほどの幅の金属をクッキーの型のように曲げていったものを溶接したものである。これを白い原料が入っているバケツの中に入れて一気に引き上げると，原料が型の枠の中に引っ掛かり，キャラクターの輪郭になる部分ができあがる。次にスポイドを使ってペンギンのお腹ならば白，体は青，くちばしは黄色，目は黒といった具合に染めた原料を注ぐ。注ぐ面積によって原料の繊維の長さの工夫が求められる。

図13. 流しすきを試みる。

図14. 図案を工夫する。

授業間の休み時間の子どもたちは，無邪気で小学生らしく運動場を走り回り，話をして笑い合ったりしていた。ところが，職人の方々を目前にすると，子どもたちは緊張をした表情をし，こまやかな一つひとつの動作や行動に集中していた。子どもたちは通常の授業とは異なり，職人のもつ厳格な雰囲気や話し方に感動や影響を受けているように見受けられた。

６．おわりに

学校教育を改善していく視点として，地域の特色を生かすことが上げられる。学校で教える内容は学習指導要領に示され，それに準拠した教科書が編集されている。全国各地でほとんど同じ内容が教えられてきた。このような状況は一律の教育水準を維持ためには都合がよいが，教育の画一化・類型化につながりやすい。それぞれの地域は独自の自然環境・文化・伝統をもっているので，その地域ならでは教材を示すことが，子どもたちの生活に関連し，学習意欲を高めることにつながるはずである。

これまで学校では「こうぞ・みつまたが紙の原料である」という暗記的なことが扱われてきた。ところがそれらがどのような木でいかなる方法や過程で紙になっていくのかを実際に知る機会はほとんどない。また，社会教育施設で紙漉きを体験できるようになっている所もあるので，小学校の頃に社会見学で体験したという大学生も何人かいたが，漉く作業の部分だけの体験であったり，腕の動かし方が難しいので思ったような紙にならなかったようであった。木を刈り取ったり皮をはぐ作業から始めたり，職人がサポートしながら技や心構えを丁寧に伝えていくというのは，美濃市の学校の特色であるといえる。

紙漉きの工程を視覚的に示すために，筆者は今のところ既成のビデオを使用しているが，できるだけ手づくりの教材に切り替えたいと考えている。そういった観点からすると１年間にわたって子どもたちの紙漉きの様子を担任の教師が記録したもの，子どもたち自身がデジタルカメラをもって実地調査をした記録は貴重である。ちなみに各学校のホームページには紙漉きの活動の様子が写真で紹介されていた。ところが，牧谷地区にあった上牧・蕨生・長瀬・片知・神洞の５校が牧谷小学校１校に再編（統廃合）されたことに伴う物品整理・教職員の転出・児童の卒業による作品やレポートの返却といった状況の中で，教育実践資料の多くが散逸した印象がある。高齢やご病気のために紙漉きに関する仕事から離れる職人も出ている。現在ならば小学校で意欲的に実践にあたられた先生方に協力を依頼できるので，実践記録・写真・感想文・参考作品等の収集はある程度可能になってくる。牧谷小学校については，本年度以降も引き続き紙漉きの実践が行われる。伝統や地域の特色を生かした実践だけに，教育情報の整理と活用にも取り組むことが課題になっている。

注

１）辻　泰秀「ものづくり教育の実践的研究Ⅰ－伝統工芸の紹介－」岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）第56巻１号　2007年　において，伝統工芸の教育実践をめぐる現状と課題や，地域における実践事例について述べた。

２）美濃市商工観光課「美濃和紙のできるまで」（発行年不明）の記述による。

３）美濃和紙の工程については上記「美濃和紙のできるまで」のプリント綴り，及び，澤村守『美濃紙－その歴史と展開－』木耳社　1983年　を参照した。

４）岐阜新聞　平成９年11月10日（月）朝刊　県内総合版

付　記

上牧小学校の実践の図版（図１～11）は，平田勝栄氏（元上牧小学校長）より提供を受けた資料「心豊かでたくましく生きぬく子の育成をめざして－紙すきの学校・花のある学校づくりを通して－」（上牧小学校）のファイルに保管されていたものです。記して厚謝申し上げます。

本稿の執筆に際して，１・２・３・４・６を辻，５を石原が担当しました。